

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また、地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもって存知せざるなり。たとい、法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。そのゆえは、自余の行もはげみて、仏になるべかりける身が、念仏をもうして、地獄にもおちてそうらわばこそ、すかされたてまつりて、という後悔もそうらわめ。いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

第4組 瑞雲寺住職

## 第二章 「よきひとのおおせ」

小泉 元瑞

text by Genzui Koizumi

### 疑情のゆえの不信

親鸞聖人が関東を去られた後の同朋の人々の信の変質は何が原因なのでしょう。成仏得道において、いつでもどこでも、そして誰にも、わけ隔てなく通ずる普遍の法を易行といいます。当然聖道の諸宗にあっても、それぞれに自力で成仏する道を主張することでしょう。しかし煩惱成就のこの身においては、たすかる道は本願力回向の念仏の法しかないのです。ところが、そのように聞かされても尚、私たちが領けないということが問題です。特殊の機である私たちは、その人間関心によって、誤って特殊の法を求めていないのでしょうか。ですから、「あんなわがままな人も往くような浄土なら、私は往きたくない」とか、「今まで耐えてきた私は、あの人よりは立派だ」というような意識が不公平感を生むのですが、その心は浄らかな心とは言えません。一切衆生と共に、という仏言を聞いて尚、共なる救いを拒むところに、愚かさがあります。下品上生や下品中生までの機においては、まだ他の方便の可能性もあるのかもしれないが、極重悪人は仏に成る他の方便なしと聞いても、本当だろうかと疑うのです。

### 一劣等感一

「優越感とは、劣等感をごま化してつくっている…優越感の正体は劣等感である、機の深信は一つの信念であって劣等感とは違う」（『首我量深先生講話集』第三巻 月愛苑刊、取意）と教えられます。私たちは「こんなダメな私では仏の印象も悪いだろう、自力で少しはマシな者になってからでない」と、おこがましくも善人を気取るのです。

かつて「お聖教の領解が十年経っても変わらないことは、停滞ではなく墮落である」という旨の言葉を聞いて、意外な感がしたことを覚えています。聖教の領解がそんなに簡単に変われば、逆に混乱するのではないかと思ったからです。しかし、実は自力の信に固執して、問い返すことがないことほど深い無明はないのでしょうか。つまり門弟の信の動揺は、善鸞や日蓮などの外的諸要因に依るものではなく、むしろ真実を求めるよりも、罪福の心によって宗祖に期待し、安心したかったからなのです。得がたい師や朋(とも)朋に出会い尊い言葉を聞かされたにもかかわらず、結果として「人我

おのずから覆いて同行・善知識に親近」（聖典三五六頁）できないのは、かつて頷いたはずの自己が、いつしか独善的とも言うべき自負心に陥っていたからなのです。それが教えと仏語に順わず、外の雑縁に左右されるような凡夫の生活そのものであります。

### —善知識—

善知識について宗祖は「一切梵行の因は善知識なり。…」（聖典三五二頁）、さらに『浄土真要鈔』では、「総じていうときは真の善知識というは諸仏・菩薩なり。別していうときは、われらに法をあたえたまえるひと」（同七二一頁）「法をきかする縁となるひと」（同七二二頁）など、私をして仏法を聞かしめ、信を生ぜしめてくださった人を善知識と教えられています。

つまり思想の固執を破り歩ましめ続けてくださる人を、遇法の喜びにおいて、よきひとというのであります。「われわれごとき本当に自信のない傲慢な人が、自信と傲慢とは反対で、自信のないものが傲慢で、あるものは謙虚である」（『歎異抄聴記』）との言葉を前にする時、宗祖を語りその言に触れてきたはずの私たちは、宗祖を真によきひとと仰ぐことがあったのか問われます。